

平成17年9月6日大水害

あれから10年

>20<

教訓は生かせるか：

パネルディスカッション

「災害の教訓を生かす」 自助・共助・公助」

【森川】ニュースで大変な惨状を伝えていたもので、台風が去った次の日に、職員ら、6人と五ヶ瀬川の上流域から車で入ったわけですが、先ほど市長がおっしゃっていた高千穂鉄道の鉄橋が流れている光景とか、あるいはレールがぐにゃぐにゃに曲がっている光景を見まして、これは大変衝撃的な光景だなと思いました。

さらに、まちでは越水した水がアーケード街を通っていきまして、すでに浸水ごみも出ており、大変な惨状でした。改めてお聞きしま

り、さまざまな課題があるということが分かります。

幸いなことに、五ヶ瀬川では本川の堤防決壊というのは免れたわけですが、大雨がもう少し降っていたら堤防が決壊し、もっと甚大な被害が出たかもしれません。

九州でもやはり年々雨が増加傾向にあります。九州での大規模な災害を見てみると、五ヶ瀬川、大淀川であった災害の翌年には、鹿児島県の川内川で激甚な災害がありました。

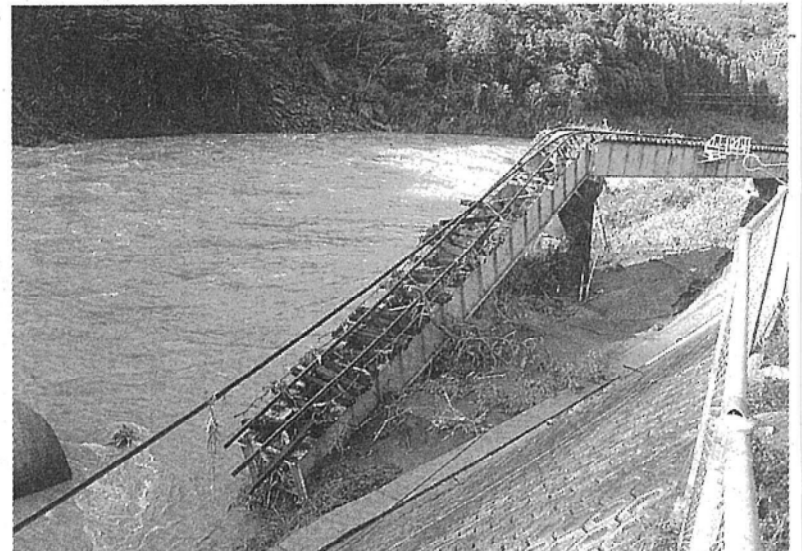
森川 幹夫氏



衝撃的だった鉄橋流失

まちではアーケードに越水

の九州北部豪雨では、熊本県の白川、大分県の日田市を流れる筑後川支川の花月川、中津市を流れる山国川、それから福岡県の矢部川では22年ぶりに九地整の直轄管理の堤防が決壊するなど、激甚な災害がありました。



洪水で崩落した高千穂鉄道の鉄橋（平成17年9月7日、延岡市北方町の旧滝下橋梁（きょうりょう））

九州でもやはり年々雨が増加傾向にあります。九州での大規模な災害を見てみると、五ヶ瀬川、大淀川であった災害の翌年には、鹿児島県の川内川で激甚な災害がありました。

河川改修あるいはダムなどのハード整備も進めていきますが、今

後、これはこれまで経験したことのないような大雨、あるいは災害に上限はないということを念頭に置き、地域全体で災害リスクを共有し、施策を総動員して

人命を守り、災害を軽減するソフトの取り組みも進めていくことが非常に大事ではないかと痛感しているところです。

【杉尾】私も土木学会の調査団長として、いろいろな調査の取り組みをさせていただいて

- コーディネーター
杉尾哲（宮崎大学名誉教授）
パネリスト
首藤正治（延岡市長）
岡田雄一（宮崎県県土整備部長）
大塚法晴（元延岡河川国道事務所長）
森川幹夫（九州地方整備局河川部長）
猪狩信浩（NPO法人宮崎県防災士ネットワーク理事長）
福島宏一（元延岡市消防団長）
亀長馨（元北方町川水流区長）

防災・減災を考える
シンポジウムから――